

平成 26 年度末大学院派遣修了に係る実践研究報告書

高知県立高知追手前高等学校 教諭 上村 潤

1 実践内容

平成 26 年度は、高等学校の「現代社会」の授業を対象に、個別の支援を考慮した授業実践としてユニバーサルデザインに基づく授業の実践研究を行った。そのなかで特に、活動内容の工夫としてグループ学習を取り入れることや、教材・教具の工夫として ICT の活用を行ったことなどにより、生徒の能動的な学びの姿勢を引き出すことに一定の成果が見られた。本年度は、高等学校の「国語総合（古典分野）」においてユニバーサルデザインに基づく授業の在り方を検討するとともに、授業への主体的な「参加」のみでなく、昨年度の実践では到達できなかった「学習成績の向上」という点も課題として取り組むこととした。

(1) 授業実践前期

高等学校 1 年の「国語総合」の授業を対象とした。4 月にサンプルとして 1 つのクラス（38 名）で「国語」の授業に関するアンケートを実施したところ、「国語」の中でも「現代文」を「好き」とする回答が約 60.5%であったのに対し、「古典」は「好き」という回答が約 28.9%に過ぎず、予想どおり「古典」に対する苦手意識があることがわかった。その理由は「言葉が難しくて分からない」「現代語訳ができない」という、語彙力や文法力の不足が主要因であると考えられるものがほとんどであった。そこで「国語総合」のなかでも特に「古典」分野に焦点を当て、ユニバーサルデザインに基づく授業づくりを行うこととした。

まず、教材ごとおよび授業ごとの目標を明確に伝えるようにした。また、情報伝達は聴覚のみによらないよう視覚的にも伝えるように留意し、音読などペアワークやグループ活動を取り入れるようにした。そのうえで、「古典」における ICT 活用の取り組みとして、基本文法事項の学習についてパワーポイントを用いた実践を行った。「古典」の学習において基本文法事項の定着は不可欠だが、そこに苦手意識を持ちその後の学習に影響してしまうという例は少なくない。そこで、具体的なゴールの明示、スモールステップ化、ICT 活用による視覚的な情報提示と反復練習を実践した。具体的には、古文の用言の学習に入る時点で、まず典型的な基本問題を先に提示しそれに解答できるようになることが第一ステップであることを示し、次に、学習内容を数段階に分け、パワーポイントのアニメーション機能を利用しながら活用の種類や活用表などの説明をしたり、逆に空所補充の形にして答えさせたりした。同様に、漢文の基礎学習においても、日本語とは異なる文の構造の理解や句形の整理のためにアニメーション機能を活かしたり、白文をあらかじめスライドにしておき、投影した白文に訓点を入れさせたり訓読させたりした。ICT 活用による利点は、例文や表のフォーマットなどを板書する時間が短縮できるためより多くの練習が可能であること、また、前時の内容が視覚的にまったく同じ形で提示でき反復しやすいという点であった。

(2) 授業実践後期

1 年前半では以上のような実践を行ったが、その取り組みと生徒たちの学びの姿勢および学習成績との関連は明確でなかったため、後半では、習熟度によって編成した「基礎講座」の授業において、定期テストに向けて学習成績の向上を目指す取り組みを検討した。対象は、生徒 13 名、授業時間 50 分×14 コマとした。該当講座の生徒は、既習事項の習得が十分ではなく、学習面での肯定的意識の低さも見られたことから、初めの単元（7 コマ）では前述した授業ごとのゴールの明確化、ペア・グループ活動による学習形態の工夫などに加え、毎時間必ずこれだけは定着させたいという基礎文法事項を 1～2 ヶ所決め、そこは「重要」というプレートを貼って目立たせ、十分にアイコンタクトをとり指名して答えさせながら定着を図った。さらに、後の単元（7 コマ）では授業の最後の 5 分程度で「ミニ確認テスト」を毎回実施し、基礎的な重要ポイントを理解できたか確認した。ミニ確認テストの表紙には自己評価表を添付し、毎回の得点と生徒自身のコメントを記入させるとともに、授業者からの肯定的なコメントを加えることで意欲向上を図った。

結果、その後に実施された定期テストにおいて、講座分け以前に学習した単元の設問（問題A）、講座分け以後にユニバーサルデザインに基づく授業づくりを実践した単元の設問（問題B）、さらに毎時間の「ミニ確認テスト」を加えて学習した単元の設問（問題C）に分け、対象とした「基礎講座」とそれ以外の「応用講座」との間で平均得点率を比較したところ、問題Cにおいて最も得点率の差が少なくなっていた（図1）。

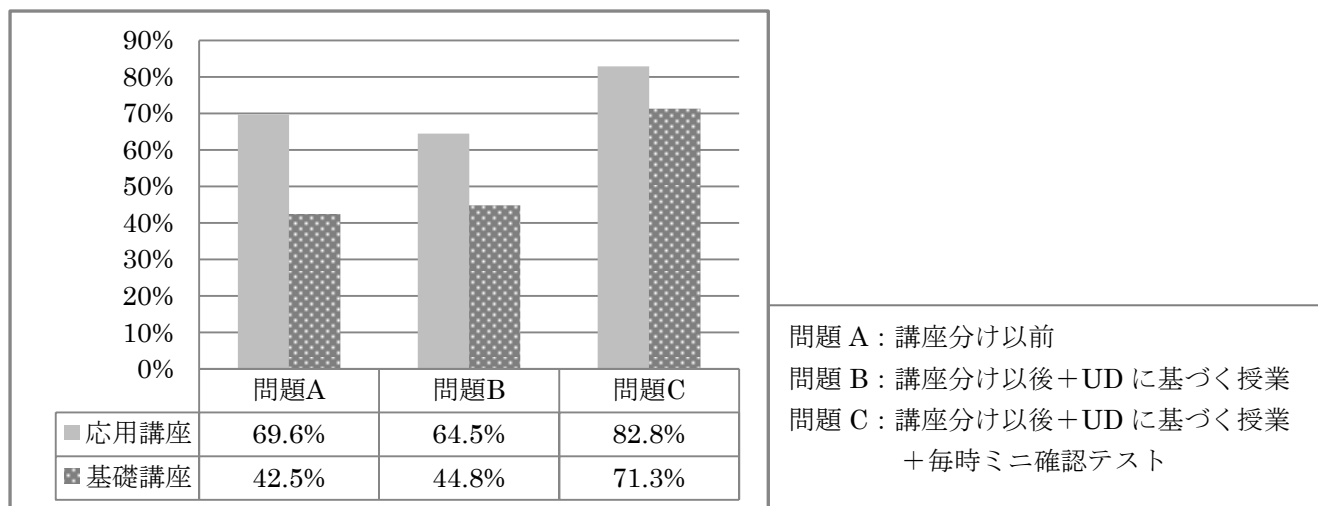


図1 定期テストにおける設問別平均得点率

問題Cは、テスト前に学習した単元であり記憶が新しいという点や、問題AおよびBに比べて総じて平均得点率が高いことから問題自体が取り組みやすいものであった可能性も考えられる。しかし、対象講座の生徒への授業評価アンケートにおいて、習熟度による少人数の講座編成について全員が「よかった」と回答し、その理由（複数回答）として「集中しやすい」（10名）、「基礎的なことから確認できる」（7名）、「積極的に参加できる」（5名）という点を挙げていたこと、また、毎時間の「ミニ確認テスト」についても全員が「効果があったと思う」と答え、その理由に「学習ポイントがわかる」（11名）、「集中して授業に臨める」（8名）、「自己評価表が次の意欲につながる」（3名）という点が挙がっていたことなどから、「基礎講座」における実践は、学習意欲や集中力の向上、一人ひとりに応じた基礎基本の徹底やポイントの整理に役立ち、結果的に得点率の向上に一定つながったものと考えられる。

2 成果と課題

前期の取り組みにおいては、ユニバーサルデザインに基づく授業実践のなかでも ICT 活用による利点をとらえることができたこと、後期の取り組みにおいては、習熟度に応じた少人数の講座編成や毎時の確認テストの実施が学習意欲や定期テストの得点率向上に一定の有効性を持つと考えられたことがそれぞれの成果であった。

しかし、こうした取り組みは、例えば40人クラスの一斉授業においては現実的に実施困難な部分もあり、必ずしも普遍性のある方法とは言えない。本校の生徒は、平均的な学習意欲は高いものの学校適応感尺度「アセス」（ASSESS: Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres）における「学習適応感」は総じて低い傾向にあり、そのことがひいては生活全体の満足感や自己評価を低下させる場合もあることから、本校における授業のユニバーサルデザインとは何かということを追究するとともに、常に、生徒たちが実感できる形での学力向上を図っていくことが今後の課題である。